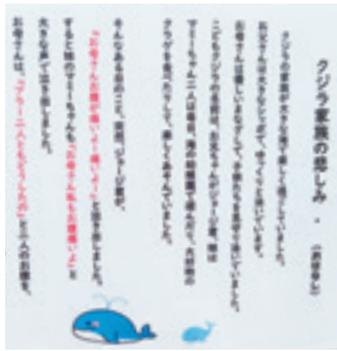




休耕地や荒地を植樹の場に



幼稚園へのお出前授業のようす。寸劇「クジラ家族の悲しみ」でごみのポイ捨て問題をわかりやすく伝える



クジラ家族の悲しみ



道路や河川の清掃をおこなう

NPO法人
吉野川に生きる会

ただいま
活動中

環境保全と
産業育成に生かしたい！
早成桐の植樹

四 国山地西部の瓶ヶ森に発し、四

国4県にまたがる流域を持つ全長19.4kmの吉野川は、四国最大の一級河川だ。山間を縫って西から東へ流れ、大小の川を集めて紀伊水道に注ぐ。山々の栄養分を含んで水量が多く、流域に肥沃な土壌をもたらしてきた。

NPO法人吉野川に生きる会(徳島県吉野川市)は、清掃活動やイベントの開催、早成桐の植樹、環境教育などを通じ、吉野川流域の環境保全と街づくりに取り組んでいるグループだ。

「川島商工会シルバー(勉強会)の参加メンバー同士が親しくなり、2007年から3年間の勉強会を終えて団体を設立しました。勉強会では四万十川の視察に行き、私たちのそばにも吉野川という大河があるのに、その恵みに気づかずにいたんだなと思いました。農業に最適な土地を吉野川が育くんでいること、奈良や京都に食料を供給していた歴史を勉強会で知り、吉野川をもっと大事にして、産業に生かす活動をしていこうと考えたんです」と、代表理事を務める島勝伸一さんは話す。

10年6月に団体を設立し、10月にNPO法人になった。流域の清掃活動を始め、自然を壊すことなく、吉野川の

温暖化の防止と脱炭素社会の実現に役立つ。農家の収入に繋がり、桐を使う産業の育成、環境保全にもなると考えた島勝さんたちは、20年秋に100本の苗木の植樹会を開いた。それからは早成桐について勉強しながら、春と秋に植樹会をし、桐の成長を見守る観察会も開いている。早成桐を植えて脱炭素社会の実現を目指すこの活動は、セブーンイレブン記念財団の助成を受けておこなわれている。

「最近雨の量が減っていますが、降るときはどつと降ります。豪雨は土にしみこまないで、農業によくはない気候になってきていると思います。林業の不振で放置林も増えていて、山の保水力がなくなると動物や人間の生活に影響します。海外では砂漠化の防止や原生林保護のため早成広葉樹の植林が進められていますし、我々の地域でもうまく使って産業の振興と環境保全に繋がっていきなさい。周りの草を刈らないと弱い桐になるので、最近時間があれば草刈りをしています」(島勝さん)

活動開始から10年以上が経ち、継続と後継が課題だ。メンバーになる若い人もいてくれて、約30人で設立した会の会員数は、62人になっている。

恵みである農林水産物を活用した産業と観光を振興しようと、自然栽培の農業を始めた。吉野川の河川敷で1月から咲き始める菜の花に着目し、休耕地に菜の花を植えて菜種油を採り、菜の花が最盛期を迎える3月に「菜の花フェスタ」を開催している。20、21年はコロナ禍でやむなく中止したが、今年は12回目を開くことができた。

そのほか、郷土の歴史勉強会、毎秋テーマを設けて子供たちがグループで創作をする「こども絵画展」、こども園や幼稚園へのお出前授業など、多彩な活動を繰り広げている。

「出前授業では、ごみで海が汚れてしまふ『クジラ家族の悲しみ』という物語の寸劇をして、ごみのポイ捨てはしないでね、家に帰ったらお父さんやお母さんに話してねと、小さい頃から環境に目を向けてもらえるように易しく話しています。園児と一緒に桐の植樹もしています」(島勝さん)

休耕地に「早成桐」を植える活動は、20年から始めた。桐は成長が早く約20年で成木になるが、早成桐は4〜6年で高さ12mもの成木になる。スギやヒノキよりも多くの二酸化炭素(CO₂)を吸収するため、早成桐の利用は地球

「設立当時は現役で働くメンバーばかりだったので、できるだけ時間を拘束しないで、できるときにできる人ができることをやるというスタンスで進めてきました。NPOは続けることが大事です。無理をせずに続けること、そしてどう後継者を作っていくかを、3年ほど前から重視しています。お米や野菜を作ると同時に販路を開拓するなど、若い人が本業を続けながら参加できる活動を目指しており、最近では都市部の就農移住者支援の若者との交流も楽しみの1つです。活動してみんなに喜んでもらえるとやりがいを感じますし、誰かが続けて残していかないとここで切れてしまふ。だからいろんなことをして、できるだけ繋がってほしい」とみんなで話しています(島勝さん)

今年3月にリニューアルした団体ウェブサイトに、古くから人々の暮らしを支えてきた大河、吉野川がゆったりと流れ、にじんだ夕日が真西の上流に浮かんでいる、美しい景色が掲載されている。大切な吉野川と流域の暮らしを守り伝えるために、島勝さんたちは日々活動している。



セブーンイレブン
記念財団
助成しています



流域ごとに移り変わる景観の素晴らしいから「四国三郎」とも呼ばれる吉野川。夕日が映える



植えて1年10カ月になる早成桐。伐採された早成桐の成木は内装用建材として利用し、収益化を目指す



温室効果ガス削減固定量は杉の8〜10倍ともいわれる早成桐。この小さな苗が4〜6年で成木化する



子供たちがグループで創作をする「こども絵画展」は毎年秋に開催

川島城下の広場で開催される「菜の花フェスタ」。武者行列やキッズダンス、健康体操などさまざまな催しは地元の春のイベントとしてすっかり恒例に

